



特選 爪伸びてふむふむ私育ってる

犬上郡多賀町 清水容子

(評) 爪を切る時「生きていく」と実感するのは元氣な時も病む時と同じだが「育ってる」と看破する目は川柳感そのものだろう。「ふむふむ」という感動詞も光っている。自分の今を見つめている姿勢は好感がもてる。(亨子)

入選 溜めていたボタンに子らの顔浮かぶ

鳥居本町 谷口繁子

(評) 子らの着古した上着やズボンなどのボタン、取れたままになっっているシャツのボタンなどが、針箱にごちゃごちゃと溜まっている。それらのボタンの一つ一つに、子らの一人一人に関わる感慨深い思い出がある。(十九郎)

入選 わたくしの未だ未だを引き出そう

日夏町 寺村保子

(評) 一読その生きざまを見せられた感がありその力強さに圧倒される。自分の未来に可能性を見出しそれを実現するべく努力しておられる姿が見える。(亨子)

特選 なきそうにさくらわらっているのです

地蔵町 大谷のり子

(評) 泣きそうになりながら、それでも笑おうとしているのは桜を見上げる作者自身でしょう。簡潔な言葉遣いですが、複雑な心境も感じられます。花の頃の心がざわざわするような感覚を思い出しました。ひらがな表記がやわらかなニュアンスをよく伝えています。(裕見子)

入選 あはははに私もあははは春の中

須越町 島田洋子

(評) 明るさがいいです。明るさは伝染して笑顔の輪が広がっていきます。「ははは・春」のハ音の繰り返しにも翳りや屈託の無さが出ました。(裕見子)

特選 折れ線をたどった先に虹を見る

日夏町 島田輝子

(評) 今こうして幸せな暮らしができるのは、幾多の困難を乗り越え、波乱に富んだ日々を懸命に生き抜いてきたからである。あるいは、寝食を忘れるほど苦心惨憺して得られた成果に満足している。それらが、この句から読み取れる。(十九郎)

入選 子の縁で心の花が咲きました

須越町 疋田弥栄子

(評) ご縁ということの難しさとありがたさを感じさせる作品。長い間、心を痛めてきた子の縁談が、まとまったのであろう。心の花が咲きました、に心の重荷から解放された親の嬉しさがよく表わされている。(十九郎)

入選 なにもない古里だけど温い風

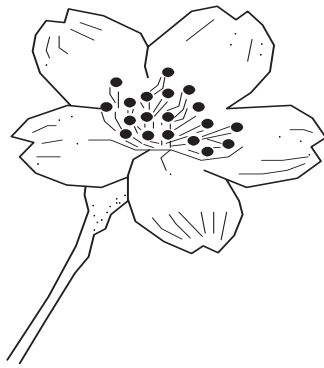
東沼波町 沼波 ひろ子

(評) 人口の減少傾向が続くいま過疎の古里は増え続けています。離れて思う古里は懐しい思い出と心豊かに育てられた大切な所です。そこに吹く風は忘れられない温かさと変わらないやさしさを含んでいます。(亨子)

入選 心配を掛けないように咲いている

堀 町 河分 武士

(評) 「咲いている」は「生きている」ということに他ならないでしょう。作者は生かされている自分を認識しています。また、周りの人たちへのまなざしを感じる作品です。(裕見子)



佳作 村に一つ国旗出ているみどりの日

東近江市 田中和子

佳作 よう履いてくれましたたなあありがとう

近江八幡市 浅野 忍

佳作 宿題に○がもらえぬままの秋

正法寺町 高井 豊

佳作 何事も無かったように青い空

鳥居本町 辻 久栄

佳作 病室に居る嫁さんにケーキ買う

肥田町 藤野 佐津子

佳作 参道をシルバーカー押し桜観る

宇尾町 寺 倉 文子

佳作 天辺にきのう残したまま降りる

犬上郡豊郷町 須田 さゆり

佳作 跳んでみるまだいけますよ弾む声

甘呂町 辻 静 枝

佳作 心の襷に行きわたらせているみどり

平田町 竹内歌子

佳作 何よりも普通の暮しおぶくさん

大藪町 大塚しのぶ

佳作 春なのになんやかんやと白い雲

大津市 小西幸子

佳作 まだまだこれから埋めてゆくとこ

東近江市 河崎章

佳作 エンディングノート書き込み再起期す

極楽寺町 古川寛二

佳作 夢見る米寿空気にはなれませ

甲崎町 杉原源一郎

佳作 ふわり浮くアヒルと孫と湯気の中

西沼波町 外海芳子

佳作 靴底や歩きあるいて稼いだよ

岡町 宮地学

佳作 声たかく九九暗誦の子の下校

稲里町 藤野千枝子

佳作 孫が熱出す時のみの我が保育

地藏町 佐古徳子

佳作 鍵あける帰りまっけた普段履

松原町 川村美栄子

佳作 荷をおろし帰りの月はすみわたり

京町二丁目 川辺由子

佳作 乗り越えてやっとな笑顔の仲間いり

清崎町 柳本和子

佳作 不整脈雲に乗るかと問いに来る

稲里町 覇流 不良者



《総評》

川柳は、五・七・五音合わせて十七音の言葉を基準とする短詩型文学と言われている。

川柳を創作する場合、まず、作者の思いを確かにしなければならぬ。次に、その思いを読者に伝えるための適切な表現方法を考える。前記十七音の言葉を基準とするという制約はあるが、読者に作者の思いを的確に伝えるための表現方法は、自由であり多様である。作者が好む、あるいは、意図する表現方法を用いればよい。

川柳作品の評価は読者が行う。作品が媒体となつて作者の思いが読者に伝わり、読者の共感を呼ぶことができれば作品は成功である。川柳作品は読者をつくる。読者は川柳作者を育てる。川柳作者は川柳の読者でもあるから、作者と読者の両面の研鑽を積んでゆかねばならない。

青木 十九郎

今年も多くの作品が寄せられ嬉しく思っています。作品も人間を詠むという気持を全面に出し日々の暮らしの中で感じた喜び悲しみを表現された句が多く少しずつ変つていく作り方を頼もしく拝見しました。

心で感じたことを吐き出し、それを伝える言葉を探す、一見やさしそうで難かしく続けることの大変さを思います。言葉探しの方法もメモを取る、多読多作などその人独自のやり方があります。また各地で開かれる句会への参加も五・七・五のリズムに慣れることが出来るでしょう。

上手に作ろうと思わずまず自分の心を広げてその上で感じたことを書いてみましょう。新しいあなたを発見出来るかもしれません。

来年度も多くの作品が集まることを期待しております。

青山 亨子

現代の川柳は政治や他者への批評、あるいは世事を面白おかしく書くだけのものではありません。今の自分の姿や想いを表明する人間風詠の一行詩です。

「私」の喜怒哀楽のすべてがテーマになるのですから、自分を客観視する目を持たなくてはなりません。作者自身の体験や体感を一句の核として据えることが大事だと思えます。自分の心に正直に書かれた作品は読む者を引きつけます。そういう点では、今回の応募作品には自身を見つめる川柳が多かったと感じました。

彦根は高い文化の土壌を持ち、穏やかで周囲との調和を重んじる人情の土地柄です。その良さを踏まえたうえで、個々の多様性を認め、「私の世界」を探り、作品を書いていってほしいと思います。

峯 裕見子

選者吟

草木萌ゆ積み重ねゆくフィロソフィー

青木 十九郎

これからの道がここから太くなる

青山 亨子

貝ボタンでさくりと留めてある五月

峯 裕見子